

序

桂島宣弘先生は、二〇一九年三月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会では、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、ここに「ご退職を記念する論集を編み、先生に献呈させていただくこととしました。」

桂島宣弘先生は、東京都のお生まれで、東北大学工学部を経て立命館大学文学部に学士編入学され、ご卒業後、立命館大学大学院文学研究科に進学されました。そして一九八三年四月に日ノ本学園短期大学の専任講師に着任され、研究者としてのキャリアをスタートしておられます。そして、一九九五年四月に文学部の日本史学専攻の助教として立命館大学に着任され、現在まで二四年間にわたって本学の教育・研究に力を尽くされました。この間、数度にわたり日本史学専攻の主任、副学部長などを歴任され、二〇一〇年四月より四年間、文学部長とられるなど、学部・大学・大学院の発展に寄与してこられました。

桂島先生の専門分野は日本近世思想史で、江戸時代の思想家を軸に、日本におけるナシヨナリズムの誕生といった、斬新な視点での日本史研究に挑戦してこられました。例えば「宣長の「外部」：18世紀の自他認識」（『思想』第九三二号・二〇〇一年）を読めば、その洞察の深さはもとより、表現力、発想力の素晴らしさに圧倒され、論文の内容に引き込まれることは間違いありません。これまで多数の著書の執筆もされてきましたが、二〇一九年一月、定年目前に出版された『思想史で読む史学概論』（文理閣）は文学部の名物講義であった「史学概論」の講義録で、桂島先生の学生へのアウトプットの集大成とも呼ぶべきものかと思っております。そのほか、本号には桂島先生の主要研究業績一覧等も掲載されておりますが、そのきわめて多数、多岐に及ぶご業績から、めざましい成果を挙げてこられたことがわかりますし、日本史研究会、日本思想史学会や現在代表をつとめておられる東アジア思想文化研究会など各学会等で要職をつとめられたことから、この分野の第一級の研究者として大いに活躍してこられたことがわかるかと思えます。

桂島先生の功績を振り返るとき、誰もが挙げるのが国際的な研究交流や教育プログラム開発でしょう。特に韓国と中国との密な交流については、立命館大学で知らない人はいないと言っても過言ではないでしょう。また、海外の大学から招かれることも多く、韓国の高麗大学校や東西大学校、国立全北大学校など複数の大学で客員教授に就任され、中国の北京日本学研究中心の派遣教授も務められました。もちろん、海外での講義や講演は数え切れないほどこなしておられます。留学生教育にも大変熱心に取り組みされており、常に多数の大学院留学生を指導してこられました。私が以前衣笠国際センター長をしていたとき、衣笠の多くの大学院留学生と面談をしましたが、文学研究科の日本史学所属です、という留学生に「桂島先生のところですか？」と聞くと、ほぼ間違いなく「はい」という返事がありました。

その「桂島チルドレン」たちには、現在中国や韓国で研究者として活躍しておられる方が多数おられます。

教育プログラムでは、日韓中連携講座に触れないわけにはいきません。本学と韓国・東西大学校と中国・広東外語外貿大学の三大学を衛星で結び、テレビを通じて三大学の学生が議論を交わす全く斬新なこのプログラムは、一〇数年を経て現在も続いています。この日韓中連携講座が、現在の立命館大学文学部の国際化の象徴とされる「キャンパスアジア・プログラム」の母体となりました。三大学の学生が日中韓三キャンパスを二年間に二周するキャンパスアジア・プログラムは、二〇一一年に文部科学省の「世界展開力強化事業」に採択されてパイロットプログラムが始まり、最終評価でSという最高評価を獲得しました。二〇一六年からは毎学年参加できる常設化プログラムが始まり、三大学合計で一学年六〇名の学生がキャンパスアジア・プログラムで学んでいます。実現不可能とも思われたこのプログラムの成功には、学部長として強力に推進された桂島先生の力量と情熱に負うところが極めて大きかったのは間違いありません。

先生は、大学行政においても活躍されました。文学部においては「改革の桂島」というイメージが強く、二〇〇四年の人文総合科学イニシアティブ総合プログラム・国際プログラムの開設、二〇一二年からの学域制という大改革にも、桂島先生の行政手腕が存分に発揮されました。また全学でも、一九九七年に衣笠新展開事務局委員、二〇〇一年に新世紀学園構想委員会委員長、二〇一〇年にコア研究センター長、二〇一五年に史資料センター長をお務めになるなど、職員からも大いに信頼を得ておられました。

桂島先生のお人柄について語るにはこの誌面では限界がありますが、その厳しくも人情味のある指導や業務への姿勢により、あらゆる人から尊敬され慕われる存在であったことは、二〇一九年一月に創思館カンファレンスで行われた最終講義が、学生・職員・教員はもとより、OBも家族で駆け付けけるなど、立ち見が出る盛況ぶりであったことから、うかがえることと思います。

桂島先生はその教育・研究を通して優秀な研究者・教育者を多くお育てになりました。次の時代の日本史学を担う人材が、先生の教えを受け、国内にとどまらず世界中で広く活躍しています。二〇一九年四月からは特任教授として、しばらくは引き続き桂島先生に教鞭をとって頂けることを、大変ありがたく存じております。今後とも、立命館大学、そして文学部へのご助言を賜うることができますれば、幸甚に存じます。

二〇一九年二月

立命館大学副学長（前文学部長）

上野隆三